

「聞の成就としての仏説 一親鸞の眼を通して」

大谷大学 一楽 真

「経典とは何か」を問う時に、「仏説を伝える典籍」と一応は答え得るであろう。しかしその時には「仏説とは何か」という問いが起こることになる。さらには、「仏とは何か」という問いも必然するであろう。どれも仏教に関わる者にとっては大事な課題であるが、今回の発表では問う方向を転じてみたい。それぞれの概念を確認し規定していくのではなく、経典が人間の上に何を開くのか、仏説を聞くところに何が起こるのか、という視点から尋ねていきたい。それは、親鸞が「真実教」を顕らかにする際に、採った方法であると思われるからである。

親鸞は「顕浄土真実教文類一」（以下「教巻」）において、『大経』序分に説かれる釈尊と仏弟子阿難の問答に着目している。それは、長年、釈尊に常随昵近してきた阿難が、普通の法に立っている釈尊に改めて出会うという出来事であった。逆の言い方をすれば、釈尊のそばで説法に接していても、釈尊の説く法には気づくことができなかつたことを物語っている。とすれば、仏説を聞くとは決して外見や形式の問題ではない。阿難で言えば、それまで気づかなかつた世界に出会つたのであり、阿難自身に変革が起つたことを意味する。この阿難における変革ということをもって仏説の成立を考えてみたい。

これは『大経』が釈尊出世の本懐を語る経典であると言う場合にも留意すべき問題であると思われる。出世本懐といえ、すぐに『法華経』と『大経』とを比較して論ずることが行われてきた。しかし、親鸞は経典を比較したり、ましてや優劣をつけたりということは決してしていない。親鸞が出世本懐を取り上げる視座は、「教巻」に述べられる通り、「何を以てか出世の大事なりと知ることを得るとならば」という一点にある。何が出世の大事であるかと言うのではなく、「知ることを得る」、「得知」ということにはずさない。出世の大事は知られるべきものであつて、知ることを抜きにしていくら解釈してみても、それは人間の思いを出ない。如来の出世の大事を知るところに、知つた者にどのような変革が起るか、この視点に重きをおく必要があると思われる。

一つひとつの経典がどのような課題をもって説かれているか、またどのような背景があつて成立してきたか、これらも大切な課題であることは言うまでもない。親鸞で言えば、釈尊の一代教を「顕彰隠密」という視点を踏まえて確かめていくことが行なわれている。ただ、それは決して経典を分類するために行なつたのではなく、どこまでも、仏説を聞くことがどこで成立するかという実際の課題が根本にあつたことに着目したい。

【キーワード】

仏説、親鸞、出世本懐